

接尾辞「がる」「ぶ・む」の対立

——その意義論的考察——

東 辻 保 和

はじめに

接尾辞「がる」を伴う語（以下「がる」動詞とよぶ。）と「ぶ・む」を伴う語（以下「ぶ・む」動詞とよぶ。）との意義関係については、いまだ明らかでない点がある。たとえば、「あはれがる」と「あはれぶ」とは同義だとする説と異義だとする説とがある。仮に同義であつても、あるいはそうでなくても、その結論が「あはれがる」と「あはれぶ」との関係においてのみ有効なのか、あるいは一般に「がる」動詞および「ぶ」動詞に通じて有効なのか、その点は明らかでない。小稿では、古代語の文献から用例を集め、両者の意義関係を明らかにしようと思う。なお、「ぶ」と「む」との関係も問題となるであろうが、阪倉篤義博士が「ムとブとは、同一の接尾語の、子音交替形であると思はれる」とされたのに従い、したがって考察は、「がる」動詞と「ぶ・む」動詞との関係として進めて行こうと思う。

第一節 資料

(一) 依拠した文献の範囲は、次のとおりである。索引類については、編著者名を省略させていただいた。

万葉集・古事記・竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・篁物語・落窪物語・源氏物語・浜松中納言物語・堤中納言物語・大鏡・土左日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記・枕冊子・古本説話集・古今和歌集・後撰和歌集（以上は公刊の索引による。）東大寺図書館蔵法華義疏紙背和訓索引（訓点語と訓点資料第七輯）・知恩院蔵大唐三藏玄奘法師表啓索引（同第四輯）・日本靈異記諸本訓釈索引（同第三十七輯）
・西大寺本不空羼索神呪心經寫德点の研究―釈文と索引―（国語学33）
・宇津保物語・三宝絵詞（以上は古典文庫本による。）
風土記・祝詞・栄花物語・夜の寝覚・狭衣物語・今昔物語集（以上は日本古典文学大系本による。）
和泉式部歌集（岩波文庫本）
八代集抄（山岸徳平編）
金剛波若経集験記・真福寺本将門記・打聞集・史記孝文本紀・同呂后本紀・神田本白氏文集天永点・唐

大和上東征伝・岩崎家旧蔵日本書紀推古・同皇極・前田本冥報記
 ・醍醐寺本遊仙窟・新撰字鏡・承暦三年本金光明最勝王経音義・
 三卷本色葉字類抄・類聚名義抄(圖書寮本・観智院本) (以上は
 複製本による。)・続日本紀(国史大系本)・百座法談聞書抄
 (佐藤亮雄編新版)・古点本の国語学的研究訳文篇(中田祝夫)
 ・東大寺諷誦文稿の国語学的研究(同)・西大寺本金光明最勝王
 經古点の国語学的研究(春日政治)・訓点資料の研究(大坪併
 治)・興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究訳文篇索
 引篇(築島裕)・新訳華嚴経音義私記倭訓攷(岡田希雄)

(一) 語基の文法的性質によって、次のように分類する。体言性語
 基(名詞性語基・形容動詞語幹性語基・漢語)・動詞性語基・形容
 詞語幹性語基(ク活用型・シク活用型) 其他の語基

(二) 「[]」のみの接合の語基

(三) 「[]」のみ接合の語基

(四) 語基を意義によって分類する。(これについては第二節に詳
 しく述べる。)

(五) 語詞の典拠所在は紙幅の都合で一切省略する。

(六) 後の記述の便宜のために、源氏物語の用語には水印をつけ
 た。

〔語彙表〕

	体言性語基	動詞性 語基	形容詞語幹性語基		其他
			ク活用型	シク活用型	
がる	I ひらがる				
	II むらがる		せばがる	つよがる	と
抽象的関係	I ひらむ		ころせがる		
	うしろむ かちそ そばむ うちそ そばむ したむ しわぶ(む) そむつ ばむ(む) なたら ぶゆふぶ よのつ ねぶ		あざぶ(む) あらぶ(む) くしぶ はげむ いちはやぶ うちゆる(む) いたま かる(る) おぶ(む) こい かるぶ たかぶ(む) いた なるぶ(む) にとぶ ふる ままぶ ふとぶ ふるよ ままぶ ゆぶ(む) ぶよ わむ わかぶ わる(る) ぶをさなぶ		たわむ なよな ぶな ぶな こぶ
人間活動の主体	II *あるじがる				
	*おやがる				
II	*あたむぶ *う				
	*おちなぶ *お				
III	*おきなぶ *か				
	*おなぶ *む				
III	*おなぶ *ひ				
	*おなぶ *こ				
III	*おなぶ *山				
	*おなぶ *				

		ぶ *ゐるなかぶ をんなぶ			
人間活動 精神	I がる	*あはれがる *なさけがる	*あやふがる いたがる *かしてがる かたじけ ながる *たふとがる にくがる *ねたがる	*あたらしがる *あや しがる *いとほしが *いぶかしがる うれし がる うつくしが *おそろしがる かなし がる くやしがる *く しがる *をかしがる	
		*えんがる *ぎえがる *さかしらがる *しふねがる *せうそこがる *つれづれがる *ねんごろがる	あやにくがる *うしろ めたがる うたてがる *うらがさがる *おぼつ かながる おもしろがる *かたはらいたがる かう ゆがる 心うがる 心う とがる *心つよがる 心にくがる *心もと がる *ことよがる な はがる すべながる こ ぶたがる *ふくつけが る めでたがる *物う がる *物うるさがる やふさがる やむこと がる ようながる *ら うたがる	あさましがる いそがし がる うらやましがる *くすしがる *ましく *みるこころあしがる *しがる しうさうしが *さかさがる *うす *がる たのしがる げかしがる *なまし はがる *はかばかしが る *うかしがる *見ぐるまほましが る *まじがる *めづ る *物ゆかしがる *さしがる *ゆかしが る *ゆしがる *わづら しがる	
および 行為	I ぶ・む	*あはれぶ *なさけぶ	*あやふぶ(む) いたむ かしてむ かたじけなむ *たふとぶ *にくむ *ねたむ	あたらしぶ *あやし (む) いとほしむ いぶ かしむ *うつくしぶ (む) うれしおそろし ぶ *かなしぶ(む) くや しぶ(む) *くるしぶ (む) をかしむ	
		*あてぶ うそ ぶ うちほゑ む うちゑむ うやぶ *うら む *かたゑむ *けさうぶ *ことさうぶ *すずらぶ な ぐさむ ほほゑ む るやぶ ゑむ	*まね いとなむ いぶせむ うちたゆむ *うちやす む *うとぶ(む) うれぶ まねぶ *むかたなむ たげぶ *たゆむ *なごむに *きぶ にこむ *はかな ぶ(む) めぐむ *やす む	あからしぶ いそむ *あざむ いやしぶ(む) う(お)む *いなぶ かむ うらめしむ う(む) はしぶ(む) したしむ うちひが (む) たくましぶ *たむ のしぶ(む) ともしぶ *ひがむ なつかしむ ぶかしぶ *かた(笑) *をしむ む *むつぶ	
自然物 および 自然現象	I がる	つかむ つくむ ふくろむ			
		III がる		*からがる きたながる うちくらがら かき(い) くらがら くらがる こす ぐらがら さむがる がる	
自然物 および 自然現象	I ぶ・む	あからぶ(む) あぼむ *つぼ む *はらむ *やはらぶ よどむ	あれぶ *あかむ *あはむ う ちあかむ *あをむ * うは白む かたむ *く ろむ *白む *にがむ *ぬるむ *はなじるむ	すずむ	きしむ たちとよ む とよむ

(ハ) 以上を基準として作成したのが別掲の「語彙表」である。

たゞし、(ニ)のうち、体言性語基の低位区分の表記は、紙幅の都合でなし得なかつた。

ところで、「語彙表」のⅠ・Ⅱに掲げた「がる」や「ぶ・む」が、Ⅰに掲げたそれと同義であると言えるかについては、かなり疑問が有ると言わねばならない。たとえば、「あはれがる」「ねたがる」などの「がる」と、「むらがる」「くらがる」などの「がる」とを一括し得るものであるか、また「あはれぶ(む)」「なさけぶ」などの「ぶ・む」と、「まねぶ」「はげむ」などの「ぶ・む」とを一括し得るものであるか、という疑問が持たれるのである。まづ、この問題を解決しておかねばならない。

第二節 語基の語義的意義特徴を通じての考察

「がる」動詞・「ぶ・む」動詞の語基を意義によって分類するために『分類語彙表』を用いた。これには、「抽象的關係」「人間活動の主体」「人間活動―精神および行為」「生産物および用具物品」「自然物および自然現象」の五大項目が立てられており、それが同時に現代語の意義領域を示すことにもなっている。勿論、この基準をそのまま古語に適用することには問題が有るが、一応の目安を付けるには有益であると考へる。

そこで、別掲「語彙表」のごとく、それぞれの語基を右の五つの意義領域に配してみた。この「語彙表」によって、両語基を比べてみることにする。

まず、「がる」動詞の語基は、「生産物および用具物品」領域に

認められず、その大半は、「人間活動の主体」と「人間活動―精神および行為」とに配せられることがわかる。ここに、「がる」動詞語基の一応の意義特徴を認め得るのであるが、他の意義領域に有る「がる」動詞について検討を加えてみよう。「抽象的關係」の「せばがる」(枕)、「つよがる」(源氏)、「ところせがる」(大和)の語基は、いかにも空間の広狭、力の強弱という抽象的關係を意味するものではあるが、それに「がる」が接合する場合は、単に抽象的關係を意味するのみでなく、それに心理的意味が加わり、窮屈な、威ばる等の意味に転じていること、一々例を引くまでもないであろう。

ついで、「自然物および自然現象」の「からがる」(源氏)、「さむがる」(枕)、「す(酸)がる」(枕)の語基は、いずれも感覚を表現するものとして、「人間活動―精神および行為」に配することが可能であろう。「きたながる」(宇津保・今昔)についても、場所の乱雑さを表す「きたな(し)」に心理的意味が加わっていることは、「せばがる」「ところせがる」等と同様に考えることができよう。このようにして、「がる」動詞語基は、そのほとんどが「人間活動―精神および行為」に配せられることになるのであるが、これらの「がる」動詞とは、いかにも異質と思はれる「がる」動詞が存するのである。即ち、「抽象的關係」の「ひらがる」(今昔)、「むらがる」(東征伝)、「自然物および自然現象」の「うちくらがる」(狭衣)、「かきくらがる」(宇津保・今昔)、「くくらがる」(竹取・蜻蛉など)、「こぐらがる」(蜻蛉)等である。これらの語基は勿論のこと、「がる」動詞として見ても、上に検討した語に見られたような意義特徴は、全く見受けられない。したが

って、これらの語は、形態的には同じ接尾辞「がる」の接合したも
 のではあるが、小稿の考察対象から外すべきであると考える。

次に「ぶ・む」動詞について考えてみたい。「語彙表」を見渡す
 と、「ぶ・む」動詞語基がすべての意義領域に亘って配せられてい
 ること、「抽象的關係」および「自然物および自然現象」における
 異語数が、「がる」動詞にくらべて甚だ多いことに注目される。し
 かしながら、「がる」と対立する「ぶ・む」という観点から眺めた
 場合、「語彙表」のすべての「ぶ・む」動詞が果してそれに該当す
 るものであるか、疑問が存するのである。「人間活動の主体」およ
 び「人間活動・精神および行為」に配せられている語は、まず問題
 が無いが、その他の領域の語については、一々検討をしてみるの
 に、「I」の「ぶ・む」動詞（たゞし、「ひらむ」は、それに対立
 する「ひらがる」に上述のごとく問題が有るので除く。）と並べ得
 る語は、わずかに「抽象的關係」の「そばむ」(源氏など)、「はげむ」
 (源氏など)、「ことなしぶ」(源氏など)、「自然物および自然現象」
 の「にがむ」(源氏など)、「はなほじろむ」(源氏)くらいしか見
 出すことができない。その他の「ぶ・む」については、形態は同じ
 であっても、「がる」に対立する「ぶ・む」と認めることは困難で
 ある。したがって、小稿の考察対象からは外すべきであると考
 える。

第三節 文体的意義特徴を通じての考察

以下の第三・四節においては意義の比較考察を行う。そのために
 は、対象をできる限り同一共時態に限るべきであると考えられるの
 で、源氏物語所用の語彙に拠ることとし、必要に応じて他の資料に

も言及することとした。

まず第一に「がる」動詞と「ぶ・む」動詞とが、会話文・地の文
 などでのような分布を示しているかを調べてみると、次表のとおり
 である。(いずれも延語数)そのうち「I」に属する語彙につい
 ては()に記入した。

	地の文	%	会話文	心内語	消息小計	%	和歌	合計
「がる」動詞	三五 (一〇)	一八・八 (一〇〇)	三 (一)	五 (一)	一三 (一)	一八・二 (一〇〇)	〇 (一)	二五 (一)
「ぶ・む」動詞	四六 (一)	二六・一 (一〇〇)	一五 (一)	五 (一)	二九 (一)	三三・四 (一〇〇)	〇 (一)	六五 (一)
動詞	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)

地の文と会話文其他との使用比率を比べてみると、「がる」動詞
 では、約八二%対一八%である(「I」のみについては地の文が一
 〇〇%)のに対して、「ぶ・む」語では、約六六%対三二% (和歌
 を加えれば三四%、「I」のみについては、会話文の方が多いが、
 例数が少いので決定的なこととは言えない。)となり、両者の比率に
 大差が見られる。これが有意差であるかどうか、カイ自乗検定をし
 てみると、次の結果を得る。

	実		測		値
	地の文	会話文 など	計	地の文	
「がる」動詞	125	27	152	104.9	47.0
「ぶ・む」動詞	446	229	675	466.0	208.9
計	571	256	827	570.9	255.9

$\chi^2 = 15.16$ 自由度 1 χ^2 0.05 = 3.84

ゆえに有意である。即ち、「がる」動詞は「ぶ・む」動詞と異り、主として地の文に用いられる傾向が有ると判断してよい。

第二に、「がる」動詞、「ぶ・む」動詞を述語とする文表現における主語を、意義の上から、「人間」を表すものと「非人間」を表すものとに分けて調べてみる。

まず「がる」動詞の場合は、次の一例を除いて、他はすべて「人間」を表している。

1 宮の、御湯持て寄せ給へるに、かき起され給ひて、程なく生れ給ひぬ。嬉しとおぼすことかぎりなきに、人に馳り移し給へる御物怪どもの、ねたがりまどふけはひ、いと物騒がしうて、

のちの事又いと心もとなし。(葵三四六―6)

この例とても、物怪が人格化せられたものであるから、「がる」動詞の場合には、総じて「人間」を表していると見てよいと考えられる。

これに対して、「ぶ・む」動詞の場合はどうであろうか。「I」の語彙についてまず見るのに、ほとんどが「人間」を主語としているが、次のように「非人間」が主語の場合もある。

2 大将は、おほやけがたはやうやう大人ぶめれど、かやうになさげびたる方は、もとよりしまぬにやあらむ。(若菜下一一三―13)

3 もし年頃老法師の祈り申し侍る神仏のあはれびおはしまして(明石七六―14)

このほか次に掲げるように、「人間」「非人間」に亘って広く用いられている。(たとえば、「殊更ぶ」では、「御もてなし」が主語、「殊更ぶ」がそれを受ける述語であることを示している。)

殊更ぶ(「御もてなし」行幸一三八―3「餅のさま」葵三七六―9)

借しむ(「世の中」葵三三九―3「世」須磨二―2) 田舎ぶ(「目」玉鬘三九二―4「搔練」玉鬘三七六―1「心地」松風二〇六―11「あたり」浮舟四二―5)

おきなぶ(「声」夕顔二九七―7) おとなぶ(「さま」賢木一―12「けはひ」若菜上三四〇―5) 山里ぶ(「網代屏風」樵本四八―12) 里ぶ(「犬ども」浮舟一五六―5「簀子」東屋六九―1) 懸想ぶ(「文のさま」夕霧二四〇―1) ひなぶ(「心」東屋五一―13) (代下省略する。

第三に、主語の人称について調べてみる。「がる」動詞を述語とする文表現における主語が、「人間」ないしは人格を付与されたものに概ね限られていることは、上に述べたところであるが、それらの主語の人称を調べてみると、そこに、ある傾向の存することを察知し得るのである。

第一人称の例は、次の二例のみである。

4 おとど、うちつけに、いといぶかしう心もとなう覚え給へど、ふと、しか受取り親がらむもびんなからむ、尋ね得給ふらむ初めを思ふに、さだめて心清う見放ち給はじ(行幸一四三―3内府心内語)

5 けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の、心まどはして、おどろおどろしう歎き聞えさすめれば、いかやうにものさせ給ふにかとなむおぼつかながり聞えさせつる(行幸一三〇―12源氏↓大宮)

第二人称の例も次の二例のみである。

6 尼君、髪をかき撫でつつ「けづる事をもうるさがり給へど、

をかしの御髪や、いとほかなう物し給ふこそ、あはれにうしろ
めたけれ(若紫一七七一12尼君↓紫上)

7 まして男は、限りなしと聞えさすれど、心やすく覚え給ふ
を、たはぶれにても、かやうに隔てがましき事なさかしが聞
えさせ給ひそ」と聞え給ふ(若菜上三六九一11明石上↓源氏)

他はすべて第三人称の用例ばかりである。挙例を省略する。一、
二人称者の状態を表すのに用いられた「がる」動詞は、全体の約一
・三%に過ぎない。

一方、「ぶ・む」動詞の場合について見ると、各人称に亘って極
めて広く用いられていることを知る。ここには、一例ずつを掲げる
に止め、第三人称の用例は省略する。

第一人称の例

8 過ぎ侍りにし人を、世に思う給へ忘るる夜なくのみ今にかな
しび侍るを(須磨六一三左大臣詞)

第二人称の例

9 あさましようもうとませ給ひぬるかな。誠に心深き人は、かく
こそあらざんなれ。よし今より憎ませ給ふなよ。つらからむ
(薄雲二六五—8源氏↓秋好中宮)

以上に述べた、「がる」動詞は(1)地の文に用いられる傾向がある
こと、(2)主語は「人間」であること、(3)主語の人称のほとんどが第
三人称であること、の三点は、とくに源氏物語の用語として眺める
とき、根来司氏の説かれた「話主」⁽³⁾との関係が強く意識されてくる
のである。即ち、物語場面に立ち会って、登場人物の模様をはじ
め、その場の状況を逐一見聞して語るものとして仮設された「話
主」の存在と、「がる」動詞の文体的意義特徴とは、まことによく

一致しているのである。それに対して「ぶ・む」動詞には、とくに
これといった特徴は見出されない。次節において、更に突込んだ考
察を行いたい。

第四節 文表現構造よりみた意義特徴を通じての考察

(一) まず一例を掲げる。

10 ある人々も、斯かる色を疑ひ著せ奉るにつけても、「いと覚
えず、嬉しき山里の光と明暮見奉りつるものを、口惜しきわざ
かな」と、あたらしがりつつ、僧都を恨み誇りけり(手習二八
八—13)

この用例には、「斯かる色を(浮舟二)疑ひ著せ奉るにつけて
も」という、前提となる事柄が存在する。ついで、この事柄を耳聞
した者(「ある人々」)の心理的反応が、「いと覚え、嬉しき山里
の光と明暮見奉りつるものを、口惜しきわざかな」という会話文と
して表されている。この反応の叙述を承けて、観察者が観察の立場
から、「あたらしがる」という解説を施していると考えられる。相
手の外的状態を観察することによって、(相手ハイマ……思ッテイ
ル)と観察者が判断する、ということである。これは言葉を換えれ
ば、観察者が作中人物(ここでは「ある人々」)の心理をはかり、
その判断の結果を「がる」動詞で決定的なものにしているというこ
とができるであろう。そうして次に「僧都を恨み誇りけり」という
、作中人物の行為の叙述を伴っているのである。

以上の四項、即ち、

(1) 前提となる事柄

(2) その事柄を見聞した作中人物の心理的反応

(3) 作中人物の行為

(4) 観察者の判断の結果を表す「がる」動詞等の備わっていることが、「がる」動詞を用いた文表現の基本的構造と考えられる。もっとも、「がる」動詞を用いた文表現のすべてが、この四項を完全に具えているというわけではない。

さて、すべての用例について検討してみると、「がる」動詞の表す内容は、観察者の目によって把えられた作中人物（あるいは話題の人物）の心情、表情、姿態であり、個々の動作や作用を伴う当座の性格を有していると思われる。これをいさ少し詳しく述べれば、観察者は、ある特定の条件の下に置かれた作中人物（あるいは話題の人物）の、その条件に対して発現した心理的反応、あるいは何らかの行為を客観視することをおして、その場面における作中人物（あるいは話題の人物）の内面に、「がる」動詞による意味付けをするのである。その意味においては、「がる」動詞は、観察者の主観をおして把えられた対象への解釈であると言いうこともできるであろう。これは、前節において述べた、文体的意義特徴と密接に関係を有するものと考えられる。

(二) 次に、「一」に配した、たとえば「尊がる」と「尊ぶ」の如き例について、その意義を比較してみることにする。

11 君はまづうちに参加給ひて、日頃の御物語など聞え給ふ。

「いといたう衰へにけり」とて、ゆゆしと思召したり。聖の尊かりけることなど問はせ給ふ。くはしく奏し給へば、「阿闍梨などにもなるべき者にこそあめれ。行ひのらうは積りて。おほやけ知ろしめされざりける事」と尊がり宣はせけり。（若紫一

九四一—9）

この用例には、上述の文表現構造の四項、即ち、冒頭から「くはしく奏し給へば」までの前提、会話文に見られる作中人物（ここでは桐壺帝）の心理的反応、「尊がる」といふ観察者による解説、および「宣はせけり」で明らかにされている作中人物の行為をすべて具えており、上述した「がる」動詞の意義特徴が明らかに観えるであろう。

12 年頃も、御祈りなどにつけ語らひ給ひけれど、殊にいと親しき事はなかりけるを、この度、一品の宮の御心地の程にさぶらひ給へるに、すぐれ給へる驗物し給ひけりと見給ひてより、こよなう尊び給ひて、今すこし深き契り加へ給ひてければ「おもおもしろおはする殿の、かくわざとおはしたる事」と、もてさわぎ聞え給ふ。（夢浮橋三一三—6）

この用例は、一見「がる」動詞の場合と同じ文表現構造に見受けられるかも知れない。即ち、「すぐれ給へる驗物し給ひけりと見給ひてより」までが前提となる事柄であり、次に作中人物の心理的反応の叙述を欠くが、「今すこし深き契り加へ給ひてければ」が、作中人物（ここでは薫）の行為を表すとも見られようかと思われる。しかしながら、注意深く読むと、「がる」動詞の文表現構造とは、微妙な違いの有ることに気付くのである。即ち、この前提となる事柄は、「（薫ハ横川ノ僧都ガ）すぐれ給へる驗物し給ひけりと見給ひてより」とあるとおり、「……てより」に表現されているものは、まさに当座性ではなくして持続性であり、薫の横川僧都に対する尊崇の念は、当然持続性の有るものであったはずである。このような情意が、「尊がる」とは異なり、客観的事実として、「尊ぶ」

で表されていると考えられる。また、「今すこし深き契り加へ給ひてければ」にしても、動態的というよりは、むしろ静態的と考えるべきところであろう。このように、「尊がる」と「尊ぶ」とは、その意義特徴を異にしていると判断せられるのである。

13 とあるもかかると世のことわりなれば、身一つの憂き事にて歎きあかし暮す。只この河内の守のみ昔よりすき心ありて、すこしなさけがりける。「あはれに宣ひおきしを、数ならずとも、おぼし疎まで宣はせよ」など、つるそうし寄りて、いとあさましき心の見えければ(関屋一八一—14)

常陸守の死後、歎きに沈んでいる空蟬に河内守が浮気心をかける(「なさけがりける」)。「なさけがる」の前提となる事柄は、冒頭の一文に有る。それに対する河内守の心理的反応および行為は、「『あはれに宣ひおきしを(後略)』などつるそうし寄りて」に明らかになされている。河内守が何か口実を設けては言い寄っていたことは、「など」から推測し得るところである。このようにして、「なさけがる」は、外面に現れた河内守の態度を、観察者の主観をとおして、動態的当座的に扱えたものと考えられるのである。

14 故少弐のいとなさけび、きらきらしく物し給ひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひ給へしかども、さる志をも見せ聞えず侍りし程に、いと悲しくてかくれ給ひにしをそのかはりに、いかうに仕うまつるべくなむ、志を励まして、今日はいとひたぶるに強ひてさぶらひつる。(玉鬘三六五—5大夫監!玉鬘の乳母)

この用例での「なさけび」は、前例の「なさけがる」とは異なり、故少弐の性格や生活態度を客観的事実として説明した語であっ

て、必ずしも内面外面の別が明瞭でなく、持続的静的状態を表現していると言えよう。

右のほかに、「ねたがる」「ねたむ」、「あはれがる」「あはれぶ」の例も有るが、同様に考え得るのでここには省略する。

ところで、「ぶ・む」動詞が持続的静態的属性を表すと考えるについては、次のような助動詞との承接状況をも明らかにしておく必要はない。「がる」動詞、「ぶ・む」動詞に接続している助動詞を表示すると次のとおりである。

	「がる」	「ぶ・む」
る		35
らる		20
らず	11	11
さず		8
さずじ	2	14
むき	2	1
きり	1	9
つめ	5	1
たり		3
たり		2
たり	1	11
べし		72
まじり		2
めり	1	10
む		2
む		2
む		2
なり(終止接)		1
なり(連体接)	1	
計	24	206
用例数	152	675
百分比	15.8	30.5

この表でとりわけ注目せられるのは、「たり」の接続である。「ぶ・む」動詞に「たり」の接続した例を掲げる。

- まめまめしく恨みたる、さまも見えず(帯木六二—7) ○さすがにうちあみ給へる気色、はしたなうすずるびたり(未摘花二五九—3) ○あやしきげすなど、田舎びたる山鷺どものみ(橋姫九—11)

内訳を一覧にすれば、左のとおりである。

1	3	4	4	1	11	1	2	4	2	1	5	1	1	1	4	1	1	2	21	1	
む	ゆ	す	む	ぶ	た	ぶ	な	ひ	う	さ	ぶ	ら	ぶ	ぶ	な	け	な	ぶ	ぶ	な	む
ち	や	ち	ら	き	な	も	さ	と	さ	ず	ば	ゆ	さ	か	な	ぶ	ほ	ら	な	し	を
う	う	う	う	う	お	お	お	け	こ	さ	す	そ	た	な	は	ひ	ふ	は	山	る	を

一方、「がる」動詞に「たり」の接続した例は、次の一例しか見当らない。

○…をさなくこそ物し給ひけれ」と、さすがに親がりたる、御言葉もいと憎しと見給ひて（胡蝶四二—5）

しかもこの個所は、青表紙本と河内本とで本文を異にし、河内本では「おやめける」となっている。

いわゆる完了の助動詞「たり」の意味については、諸説の有るところであるが、「①動作・現象が完了し、発現した意を表わす。②動作・作用がすでに完了して、その結果が状態として存在する意を表わす。」とする吉田金彦氏の解説、および塚原鉄雄氏の「認定を意味する」とする説を挙げれば、大きな過誤の無いことになろうか。塚原氏の説については、伊牟田経久氏の言われるごとく、「動作・作用の存在の確認ということとは、動作・作用を状態としてとらえる」ことにもなるであろうから、「たり」は「ある動作なり作用なりが継続しているとか、その完了した結果が存在するとかの状態の意味を示す」とする橋本四郎氏の説とも矛盾するとは考えられない。そこで、「たり」の意味機能がこのようであるとすれば、「ぶ・む」動詞が「たり」に接続し易く、「がる」動詞が接続し難いのは、「ぶ・む」動詞や「がる」動詞それぞれの意義に原因する

ところが有ると考えて、差支え無いであろう。「ぶ・む」動詞の意義特徴を、持続的静態的屬性を表すところに求めることは、このような助動詞の接続状況をも説明し得るであろう。

以上は、「がる」動詞と「ぶ・む」動詞との文表現構造上の意義特徴の相違点を求めたのであるが、一方において、相違点の甚だ認め難い用例が存する。次にその問題を検討してみたい。

15 夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に、尼君、しはぶきおぼはれて起きにたり。火影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥し給へるを怪しがりて、鼯とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「怪し。これは誰ぞ」と、執念げなる声にて見おこせたる、更に只今喰ひてむとするぞと覚ゆる（手習二七六—13）

この用例を、上述した「がる」動詞の文表現構造に照してみるのに、「火影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥し給へる」は、前提となる事柄であり、「額に手を当てて（中略）見おこせたる」が作中人物（ここでは尼君）の動作であり、「怪しがり」は、観察者の主観的判断による解説であると見得るであろう。これに対して、次の如き例が有る。

16 その頃高麗人のまゐれるがなかに、かしこき相人ありけるを聞き召して（中略）御後見だちて仕うまつる右大辨の子のやうに思はせてゐて奉る。相人驚きて、あまたたびかたぶきあやしむ。一国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の（下略）といふ（桐壺二—18）

いまこの用例を、試みに「がる」動詞の文表現構造に照してみるのに、前提となる事柄は、ここでは叙述されていないが、相人が光

源氏の相を見たことが前提となつてゐることは、言うまでもないことであろう。そのほか、「驚きて」は、作中人物（ここでは相人）の心理的反応、「あまたたびかたぶき」は、作中人物の行為、かくして、「あやしぶ」は、観察者の主観をとおしての解説で、当座の動態的属性を表すと考えられる。更にその後作中人物の会話が続く点でも、前例の「怪しがる」と極めてよく似ていると言わねばならないであろう。ただ、「あやしぶ」は築島裕博士の言われる訓読特有語の一であつて、博士によれば、訓読特有語は假名文学においても、「地の文の中でも殊に莊重嚴肅な場面などを表現するもの」として用いられる。この例文の場合も、博士の高説に適合するかと思われ、もしそうとすれば、位相を異にする語が混入した特例として処理が可能である。

(四) 前項に述べた推論を、更に「Ⅱ」に配された「がる」動詞に及ぼして、検討してみようと思ふ。

17 おもき病ひして、死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなり給へるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見奉りて、「我さへ打捨て奉りて、いかなるさまにはふれ給はむとすらむ（中略）此処ながら命堪へずなりぬること」と、うしろめたがる。（玉燧三六〇—14）

この用例は「がる」動詞止めであつて、文表現構造上では、作中人物（ここでは太宰少弐）の行為の叙述を欠いている。このことを検討しておく必要が有る。

一体、「ぶ・む」動詞の用例には、次に掲げることく、「しび（少）思ふ」「思ひしぶ（む）」という表現が見当る。

あやしみ思ふ（夢浮橋三二五—3） 思ひうとむ（浮舟二二六—

9） おぼしうとむ（楨柱一七五—8） かなしびおぼす（桐壺二〇—1）

これらの例は、「あやしむ」「うとむ」「かなしぶ」等だけでも、それぞれ心的状態を表現し得ると考えられよう。にもかかわらず、なおかように「思ふ」と複合させた表現が有るのである。これに對して、「がる」動詞には、そのような例は全く見受けられない。因に、今昔物語集と對照してみると、「ぶ・む」動詞には、

悲ビ思フ（卷一六、四二八—1） 恠思フ（卷三、二二六—7 ほか約八例） 惟ビ思フ（卷四、二七八—9 ほか約三八例） 貴ビ思フ（卷一五、三五—10 ほか約三例）

が見当るのであるが、「がる」動詞には、そのような例は見出し難い。これを要するに、上掲のような「ぶ・む」動詞は、「思ふ」と直接的に結合し得る意義的条件にあるのに對して、「がる」動詞は、一般にその条件に無いことを示すものではないかと、推測せられるのである。それは、「がる」動詞が、動作を伴った当座の状態と、それによつて相手の心理状態を把える観察者の主観的判断とを表す語であることの、一傍証となり得るのである。

このようなところから、本用例の「うしろめたがる」は、叙述こそなされてないが、何らかの行為、ここでは少なくとも口言葉に表出する行為を伴っていたことをも表している、と解して差支え無いであらう。

この他の「がる」動詞の「うしろめたがる」について、ここで検討することは省略するが、「がる」動詞には、「ぶ・む」動詞に見られたような持統的靜態的属性を表す例は見当らないのである。

次に「Ⅲ」に配せられた「ぶ・む」動詞の場合を検討してみなけ

ればならない。

18 過ぎ侍りにし人を、世に思う給へ忘るる夜なくのみ今にかなしび侍るを(須磨六一三)

19 ただわが恋ひ悲しむむすめの、帰りおはしたるなめり(手習二三八—五)

20 うへは、いと聞きにくき、人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへうとみぬべかめり、と思す(東屋四五—六)

右の諸例に見られる「かなしび」「悲しむ」「うとむ」は、いずれも持統性の有る心情を表したものと考えられる。また、

21 はかなびたるこそ女はらうたけれ。かしく人に躰かぬ、いと心づきなきわざなり(夕顔一六〇—四)

22 君だち、同じ程にすぎすぎ大人び給ぬれば、御裳など著せ奉り給ふ(紅梅三六八—五)

23 大将殿とは、この女二の宮の御夫にやおはしつらむ」などいふも、いとこの世遠く、田舎びにたるや、誠にさにやあらむ(夢浮橋三二二—七)

24 これはけだかく、もてなしなど恥かしげによしめき給へり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるを心得がたくなむ(玉燵三八五—二)

などの諸例における「はかなび」「大人ぶ」「田舎ぶ」「里ぶ」等は、いずれも人間の性情を表現する語であって、持統的静的状態を対象とする語であると認められよう。その点で、「がる」動詞とは異ると考えられる。

右に述べたように、「ぶ・む」動詞は、「がる」動詞と明瞭に

区別し得る例が多いのであるが、中には、次に掲げるように、「がる」動詞と極めて近似した文表現構造を有する例も見られるのである。

25 今年はこの御賀にことつけて、みゆきなどもあるべくおぼしおきてけれど、「世の中の煩ひならむ事、更にせさせ給ふまじくなむ」と、いなび申し給ふ事度々になりぬれば(若菜上三四四—14)

26 厭の人はいと疾く起きて、粥などむつましき事どもをもてはやして、「お前に疾く聞召せ」など、寄り来ていへど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、「惱ましく」

など、ことなしび給ふを、(手習二七八—14)

27 心ばへなきけなきけしく、なつかしき所おはしつる御方なれば、殿上人どもも、「ことなくさうさうしかるべきわざかな」と惜しみ聞ゆ(宿木二二八—10)

右の諸例に見られる「いなぶ」「ことなしび」「惜しむ」等の用いられ様は、いずれも「がる」動詞の文表現構造に近く、またその意義特徴であるところの、動的当座的状态を表すとする点において、近似していると言わざるを得ない。

以上述べたごとく、「がる」動詞の意味機能には、「ぶ・む」動詞の意義特徴であるところの、持統的静態的属性を表現する機能が欠けているが、それに比べて、「ぶ・む」動詞の中には、「がる」動詞の意義特徴であるところの、当座的動態的属性を表現し得る機能をも具えたものが有ると考えざるを得ない。これらの意味機能の違いは、「がる」「ぶ・む」の違いに原因するものと考えられるのである。

おわりに

以上、接尾辞「がる」「ぶ・む」の意義を、「がる」動詞、「ぶ・む」動詞およびそれぞれの語基の意義の考察をとおして考えてきた。「がる」が、「人間活動の主体」「人間活動―精神と行為」(以下、この両者を合せて「人間活動」と称する。)を表す語基にほぼ限って接合するという、ごく性格のはっきりした接尾辞であるのに対して、「ぶ・む」は、その接合する語基が、すべての意義分野に亘って存在しているという、特徴の把握ににくい、いわば広く動詞を形成する最も基本的な接尾辞である。(「ぶ・む」を造語成分と見ようとする説は、意義論的観点からも一応は首肯される。が、すべての「ぶ・む」を造語成分と見ることには疑問が有る。とくに「I」に掲げた語の場合、「がる」を接尾辞と認める以上は、「ぶ・む」をも接尾辞と認めざるを得ない。)

故に、小稿のごとき、「がる」に対立する「ぶ・む」という観点に立つ場合、まず「がる」動詞および「ぶ・む」動詞、就中「ぶ・む」動詞を、その内容面から規制統一しておく必要が有ったのである。

そのような操作を経て抽出された「がる」動詞、「ぶ・む」動詞を比較考察してみるのに、最も大きい意義上の特徴は、「がる」動詞は、観察者が相手の行為・表情などの動態を観察することによって、(相手ハイマ、:思ッテイル)と判断した、ということを表すのに対して、「ぶ・む」動詞は、静的状態(内的・外的)を客観的に表現するところにあると考えられる。したがって、「がる」動詞の表現する内容は、必然的に動的当座性を帯びていることにもなるわ

けである。それに対して、「ぶ・む」動詞の表現する内容は、主として持続性を帯び、語によっては当座性を帯びている場合も見られたのである。

思うに、語基は、「がる」動詞「ぶ・む」動詞ともに、「人間活動」を表すものに限られているのであり、ことに精神作用の場合には、本来、持続性を有する、ないしは時間を越えて存在するのが当然なのであるから、「ぶ・む」動詞の表現する内容が持続性を帯びているのは、語基の意義からすれば、むしろ当然の結果といふべきであって、「がる」動詞が持続性を表さないとこにこそ注目されねばならないであろう。

かくて、接尾辞「ぶ・む」は、語基に動詞という品詞性を与えるのであるが、意義的には語基の有する意義の上に、とくにほとんど加えるところが無いと言えるのではあるまいか。それに対して、「がる」は、上に述べたような意義を語基に加えるという、積極的な機能を果していると言えるよう。

(注)

1 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』八三三ページ
参照

兎山泰紀「『あはれがる』と『あはれぶ』」(尾道短期大学研究紀要第一八集)

2 『語構成の研究』三九八ページ

3 国立国語研究所編の再版本を用いた。

4 『対校源氏物語新釈』のページ・行を示す。

5 『平安女流文学の文章の研究』参照

6 動作や作用を伴うという点については、吉沢義則博士が『源語
積泉』で「をかしがる」の意義を説かれた際に、「…その可笑
しさが動作に現はれたのが『をかしがる』である。」と述べら
れている。また、「あはれがる」について、同趣の指摘を亀山
泰紀氏が上記論文でしておられる。

7 松村明編『日本文法大辞典』四六三ページ

8 「国文学解釈と教材の研究」九卷一三号所収

9 「月刊文法」一卷七号所収

10 『古典語 助詞助動詞詳説』一三五ページ
現代語

11 注(1)と同書。七七九ページ

(48・10・1再稿)

第六十四号 (東辻氏論文) 訂正

5 頁下段

	実 測 値		理 論 値	
	地の文	会話文 など	地の文	会話文 など
「がる」動詞	125	27	104.9	47.0
「ぶ・む動詞	446	229	486.0	208.9
計	571	256	570.9	255.9

6 頁下段7行 代下省略↓以下省略

8 頁下段4行 「尊がる」といら↓「尊がる」という

9 頁上段25行 故少式↓故少式

12 下段12行 ことなく↓こよなく